

第1分科会（教科指導）

<テーマ>

『主体的・対話的で深い学び』に対応した教科指導はどうあるべきか』

<視 点>

○（1）実践的、体験的な教科指導の展開と評価

（2）地域人材・資源等を活用した農業経営や6次産業化（商品開発を含む）等に対応した学習展開

（3）国際交流の特色ある学校設定科目等による教科指導の実践

秋田県立秋田北鷹高等学校 教諭 千葉 知 明

1 はじめに

本校は、秋田県の北部中央に位置する北秋田市鷹巣盆地にあり、周りは米代川や森吉山、白神山地など自然豊かな場所にある。地域農業では、あきたこまちを中心とした稲作が中心で比内地鶏の産地としても知られている。

平成23年に北秋田市内4校（鷹巣農林高校、鷹巣高校、米内沢高校、合川高校）が統合して、普通科6クラス、農業系学科2クラスの合計8クラスの総合制高校として新設された。現在は、普通科4クラス、農業系学科2クラスの合計6クラスとなっている。農業系学科は、生物資源科と緑地環境科があり、緑地環境科は森林環境コースと環境土木コースの2コース制をとっている。

2 緑地環境科の指導の重点

（1）緑地環境科 森林環境コース

森林と人間生活の関わりなどの体験的学習を通し、森林生態系を重視した環境保全と森林育成・利用ができる知識と技術を習得させる。

（2）緑地環境科 環境土木コース

生産基盤整備や生活環境に関する土木施工及び環境保全についての体験的な学習を通し、土木事業や国土保全に関する知識と技術を習得させる。

3 組織的、体系的学習の展開

（1）総合実習の内容と3年間の展開（各学年2単位）

1年次：測量を中心とした総合実習を実施している。

2年次：「測量」、「施工」、「水理」及び「土質」の4分野でのローテーション実習を実施している。

3年次：「測量」、「施工」、「水理」及び「土質」のいずれかの分野を専攻し、より専門的な実習を実施している。

今回の発表では、テーマについて「実践的、体験的な教科指導の展開」という視点から、緑地環境科の組織的、体系的な教科指導の展開について発表する。その中で、私自身の授業で行っているリサイクル材を活用した「コンクリート平板」づくりの指導について発表する。

(2) 課題研究の年次展開

ア 2年次 森林環境利用 (2単位)

2年次の「森林環境利用」は、学校設定科目で2コース合同で体験活動を通じて創造力豊かに学ぶことを意識している。また、平成25年度からSSHに指定された本校は、2年次に探究型のSSH課題研究という科目を1単位取り入れており「森林環境利用」はSSHと連動した授業展開をして、研究の進め方について学んでいる。

今年度のテーマ

樹木標本の作製
間伐材の有効利用に関するアイデア考案
森林生態系の学習とグリーンツーリズム
短期プロジェクト学習 (5班)

イ 3年次 課題研究 (2単位)

3年次の課題研究は2年次に学んだ研究手法の基礎的内容を系統的につなげている。

テーマ設定は、地域課題の解決に向けた班協議 (班別協議) をすることで、2年次までに専門科目で習得した知識や技能をより深めるような指導をしている。専攻班によっては森林環境利用での学びを継続研究でより深化させる内容としている。

今年度の専攻別課題研究テーマ

⇒ 森林環境コース (3班)

- ①よりよい見本林にするために
- ②北秋田市中心公園の観光地化について
- ③木工品の制作

環境土木コース (3班)

- ①地形図の活用について
- ②排水性の高いコンクリートの作成
- ③コンクリート平板の作成

(3) 農業学科における課題研究発表会

(全学年参加)

ア 緑地環境科2年ポスター発表会

クラス内で班別の発表を行いクラス代表を決定する。さらに普通科も含めた2年部でポスター発表を行い、生徒同士で質問や返答しながら学びを深める。

イ 生物資源科発表会および緑地環境科発表会

各科3年生の課題研究発表会は農業系2学科全生徒が参加して行う。発表者は全体会の質問対応のため、班で様々な質問対応を試行するなかで対話的な学びを深めている。

(4) 課題研究の取組について

ア 研究テーマ設定・・・班別協議による地域課題への気づき⇒計画のための情報収集活動

身近な課題に着目して校地内環境改善を目指した取組を実施している。座学や総合実習で得た専門性を活かし、自分たちの手で校地内環境を整えたいと研究テーマを設定した。

イ 対話的学びの工夫 (見方・考え方が働いた学び)

(ア) 班別協議・・・人数：専攻班5人、作業少数班2または3人

協議場面：テーマ設定、実習工程 (分業制作業、全行程作業)

(イ) 発問の仕方・・・柔らかいコンクリートの骨材「なぜ骨材を変えるのか」問いかけ

(ウ) 学年を越えた共同学習・・・現場見学実習、総合実習による共同学習

ウ 学びに向かう人間性 (考え方が働いた学び)

「学校に必要な環境整備」、「専門性を活かしたものの作り」という活動をとおして学校や学科への所属感、帰属感を高め、環境土木コースに学ぶ使命感ともの作りで学校に貢献する態度が育てられた。これは、生活や地域産業の下支えをする環境土木に関わる職業人としての態度にもつながる。こうした職業人としての考え方が働くことを意識した指導により、より学びを深め学びに向かう人間性を育てていると考えている。

第1分科会

分科会テーマ『主体的・対話的で深い学び』に対応した教科指導はどうあるべきか

宮城県本吉響高等学校 教諭 昆野 慶太

1 はじめに

本校は、創立72年を数える気仙沼市本吉町にある総合学科の学校である。昭和21年に津谷農林高校として農林科・農業科の2学科が創立され、平成11年に宮城県本吉響高校と改名したのと同時に「総合学科」に改編された。全校生徒数は323名。

校訓「響生・知性・至誠」を掲げ、高い意識をもち、地球環境保護のために積極的に行動する人間になってほしいという願い、21世紀における知の探求と知の発進が本校から始まるという決意、人間の不易の徳である誠の心をもって生きていくことを表している。なお、キャッチフレーズを「Make harmony」とし、「調和の心」、「豊かな感性」をもった人間になってほしいという願いが込められている。2年次から進学教養、産業情報、生活表現、人間環境の4つの系列に分かれ、人間環境系列〔農業〕を選択した2年次9名、3年次8名が日々農業を学習している。本校では2年次から2年間しか農業を学ぶことができない。その短期間の中で作物の栽培技術を学び、収穫の喜びを感じ、自分たちの手で販売する責任とやりがい、楽しさ、買っていただけるうれしさを感じながら熱意をもって学んでいる。

2 内容

(1) 実践的、体験的な教科指導の展開と評価

日々の農業学習の成果を生徒自身が実践し、それを体験させる場の提供は、自身の学びを伝えることで知識の整理、コミュニケーション能力の育成、段取り、積極的な姿勢が向上することに加え、学習したことをより深く理解するために必要であると考え。草花を通しての植栽教室を中心に展開しており、対象は幼稚園児から高齢者までと幅広い。評価は準備段階での意欲や発表態度、対象相手への接し方。対象相手の感想など。



ア 本校での実践例

馬籠幼稚園、津谷幼稚園の植栽教室の運営

毎年、本校近郊の幼稚園に出向き、夏の植栽教室を馬籠幼稚園で実施し、秋の植栽教室を、津谷幼稚園で実施している。生徒自ら植栽教室で使用する花を選定し、播種、鉢上げを行う。園児にわかりやすく伝えるためにどのようにすればよいかを考える。本年度は紙芝居を使った伝え方を実践。話す内容、紙芝居の準備、一連の練習を行い、幼稚園児の目線で考えることを重視させる。園児やその保護者、保育士の感想を生徒に伝え、次回の課題点やよりよい展開をさぐることにフィードバックさせる。



(2) 地域人材・資源等を活用した農業経営や 6 次産業化（商品開発を含む）等に対応した学習展開
気仙沼市で収集した汚泥を炭化処理した肥料を用いた栽培試験の実施を授業で展開しているが、現状で 6 次産業化に対応した学習展開は行うことができていない。今後、本校の活動が地域に浸透し、幅広い交流を深めることによるさらなる展開を模索している。



(3) 国際交流の特色ある学校設定科目等による教科指導の実践

気仙沼市では東日本大震災を経て、多くの協力をいただいて復興に向けて歩んでいる最中であり、気仙沼市の国際交流の実施、友好都市、姉妹都市の締結はあるものの、本校では教科指導内での国際交流は実施していない。

3 まとめ

『主体的・対話的で深い学び』を生徒一人ひとりに感じてもらうためには、教員は生徒が活躍することのできる適切な“場”のセッティングをする必要がある。目的や対象となる相手、場所、時間などの情報を生徒に伝え、どのように運営をするかを考える。目的を達成するために生徒が日々学んでいる農業の知識や技術を駆使し、行動し、準備する。実際に生徒が様々な問題にぶつかり困ることが重要であり、生徒自身が失敗から学ぶことも多くあると考え、教員からのアドバイスや正解を出すことを極力控えている。教員は生徒の活動を一番近くで見て、寄り添うことが重要である。対象となる相手（園児や高齢者）に合わせた話し方、伝え方、教え方を体得することで他者への理解を深めることを目標に掲げ、「農業学習を通じた人間育成」を軸に今後も様々な交流事業を展開していきたいと考えている。



第1分科会（教科指導）質疑応答・グループ協議のまとめ

【テーマ】「主体的・対話的で深い学び」に対応した教科指導はどうあるべきか

発表者 秋田県立秋田北鷹高等学校 教諭 千葉知明
宮城県本吉響高等学校 教諭 昆野慶太

<発表者への質疑応答>

○秋田県立秋田北鷹高等学校 千葉 知明 先生への質疑応答

（質疑） 山形県立置賜農業高等学校 鈴木 貴志 先生

環境緑地科は森林と土木に特化した学科ということで、専門性を活かした物作りという体験的な授業を通じて、その産業に従事するような人材の育成という目的があると思いますが、生徒の学習の成果が進路にどのように繋がっているかお聞きしたい。

（回答） 本校は1学級35名編成で森林コースの方が人気が高く、どうしたら魅力のあるコースになるかということで試行錯誤しながら取り組んでいるところです。

昨年度の主な進路状況としては森林コースでは地元森林組合、県公務員、民間企業で、土木コースでは私立大学、秋田県庁、専門学校でした。今後も魅力ある授業を心がけていかなければならないと職員一同頑張っているところです。

（質疑） 福島県立岩瀬農業高等学校 藤田 さとみ 先生

先生が生徒の話をする時すごく楽しそうなのが印象に残りました。生徒の活動を見守る中で学年を超えた共同学習が少人数制であるが故に成り立つ事なのかもしれませんが、どういった効果があるのかという事と、どういった会話がなされてどのような効果があるのかお聞きしたい。

（回答） 2年生と1年生が合同で実習に行った時に先輩達が後輩からの質問に答える姿を見て、後輩ががんばろうという意識や興味を持つ事が学年を超えた学習に繋がっているのではないかと考えます。

また、秋に生産実習があり森林コースの2年生が3年生の実習している姿を見て後輩達がそれを真似したり、先輩の後輩に対する面倒見の良さが教師が指導する以外にも良い影響を与えているのではないかと感じているところです。

○宮城県本吉響高等学校 昆野 慶太 先生への質疑応答

(質疑) 青森県立五所川原農林高等学校 三上 浩樹 先生

花のボランティア等で交流した時に子供達が変わったところ、気づいたところなどエピソードがあればお聞かせください。

(回答) 最初は幼稚園児がいない状態で台本を準備して実際にやってみたが、台本を読むだけでは上手くいかず、一度台本から離れて幼稚園児達に伝わるように話かける練習をしている姿や、当日幼稚園児と距離があったので自分達から歩み寄って危険な部分などを話かけるといった積極的な動きを見ることが出来ました。

生徒が教えるという機会は少ないと思いますが、こういった機会の中から生徒達がやれることを自分で見つけたり、積極的に動くことができるようになっていったと思います。

<グループ協議のまとめ(各班より各校での取組や状況など)>

1 班 宮城県柴田農林高等学校 洞口 泰邦 先生

事例にあった生徒の主体的で対話的な深い学びについてどうやっていくかについて話し合いをしました。そこでは課題研究の様に生徒が自分でテーマを選んでやることについては能動的、積極的に動く傾向があるが、教科書のある教科で主体的な学びにどうやって繋がっているかを各校の紹介を含めて更に話し合いを進めました。

その中で出てきた案の1つとして生徒にまず役割を与える事です。具体的には班長・副班長等の役割を週ごとに変えることで、役割が変わりその人の気持ちやその立場の気持ちがわかるので非常に良い学習になるのではないかという意見がありました。

もう一つは果樹において区画を決め、3年生になったら一人一本の樹木を与えて責任を持って育てることで、隣の木のカイロや収穫の違い等を見て、生徒同士で何が足りなかったかを考えさせることで生徒の学びを深めることができるのではないかという事例がありました。

しかし、樹によっては樹勢が異なるため、生徒のモチベーションが下がってしまうので教員がフォローしながら導くことが大切ではないかという意見がありました。

また、総合学科などで学校行事として発表会がある学校では、農業が好きではない生徒がいる事があるので、生徒達に取り組ませるための方策としては、お金を渡して赤字からスタートさせて自分の作った物を売りに行き、売れない物が出た時にそれらを売るためにはどうしたらよいか、どういったことをするべきかを考えさせることで、生徒を積極的にさせることが大切ではないかという

意見がありました。

関心の無い生徒をどうやって農業に引き込むかというテーマについては、生徒が変わる一つのタイミングの方策として、地域の保育園児や老人ホームに販売に行き、その時に喜ばれることで生徒が楽しい、多く学んでみたいと思うことで、生徒がやる気を持って今後の学習に主体的に学んでいくことが出来るのではないか、とすることを話し合いました。その中ではお金を稼ぐという事が、生徒達にとって非常にわかりやすいのではないかという意見がありました。

2 班 福島県立岩瀬農業高等学校 中畑 良司 先生

各発表の感想を述べた後、課題となるべき内容について確認をしました。千葉先生の発表については、生徒達が非常に楽しんで前向きに活動している様子が非常に印象的でした。

実際に楽しんで、前向きになれたという事について、具体的にどのような事がそうした生徒の活発な活動に繋がった理由であったのかを知りたいという感想がありました。

また、森林コースが人気であることから土木コースと比較すると、土木コースが資格取得がしやすいという観点から人気があるように思えるが、なぜ森林コースの方がコース分けをした時に人気があるのかを是非知りたいという感想もありました。

昆野先生の発表については、総合学科において出前事業や地域との連携をされているので非常に苦勞を感じました。2年生からの農業科目の履修と言うことで出前事業をする前の段階で植物の播種であるとか、育て方や植え付けなどの基礎的な学習をいつの段階で行っているのかを知りたいという感想がありました。

発表の中で失敗から学ぶことが多いが、それが良い経験になるというお話があったがどこまでの失敗が許容範囲なのかについて班で話し合いました。その中で出前授業であれば幼稚園児の前で指導するまでに、失敗しないようにするための失敗を準備の段階などでさせているのではないかという感想・意見がありました。

主体的・対話的で深い学びについての授業展開についてはそれぞれの先生が工夫をしているが、評価について、とりわけ課題研究の評価については非常に難しいところがあると思います。評価については正確に生徒を観察してあげなければ生徒のやる気に影響してしまうことから各校でどのような評価をしているか、評価についてマニュアル化しているのかというような話し合いをしました。

その中でグループ活動においてまずリーダーを育てることでグループ内の生徒達が伸びていくのではないかと、調査記録をとる事を評価の1つにしているがそれを行う場合にはグループ内のコミュニケーションをとらせるような働きかけが必要ではないかという話がありました。

また、他のグループの活動を見学させ、何が必要で何が足りないのかを助言したり、評価を出す前には必ず評価の基準を生徒に示す事が大切であったり、評価会議と題して専攻班毎のグループにおいて先生方の評価の基準が変わることがないように各グループの情報を共有して、職員間で評価

の観点を確認する必要があるという意見がありました。

最後に次回の分科会での要望として授業展開・工夫等の話し合いがあるが、実際の評価の方向について具体的に掘り下げた部分を取り上げていただけるとありがたいという話で締めさせて頂きました。

3 班 宮城県南郷高等学校 佐藤 栄聡 先生

学校毎に状況が違うということもあり、取り組んでいる中身について話し合いをしました。テーマに沿って実施するには長い時間がかかるだろうということ、やるにしても最初に教員側がテーマを出して、ルールに乗せてあげる必要があるのではないかという意見や、状況が分かってくれば、生徒達が主体的に取り組むようになるのではないかといった意見がありました。

テーマに沿って進めていく中で進路に絡めて、結果に結びつける出口の指導を見据えた指導が必要ではないのかという意見がありました。その場合、地域が重要であることや地域的な活動、例えば植栽などを利用することが望ましいのではないかと意見が出ました。

また、話し合いのなかで子供達がしっかりやってくれるかどうか、学校の現状が違うので違いが出てくるのではないかと、ルールに乗せて進んでいく中で子供達が自分たちで授業の展開に徐々に対応できるようになるのではないかと、最終的には大人と接して交流をしていく中で、自分達が主体的に学んでいきコミュニケーションがとれるようになるのではないかと意見も出ました。

4 班 宮城県加美農業高等学校 愛場 克彦 先生

各学校の現状等を出してもらってからの話し合いとなりました。どの学校も座学がなかなか上手くいかず、実習中心の授業を行っているという現状でした。その中でブラザーシステムを活用しているというお話がありました。

それは総合実習の時間で3年生と1年生を同じ時間で展開し、3年生に予め教員が指導を行い、その後3年生が1年生の指導を行うといった内容で実施されているそうで、人に教えることでより理解を深めていくような授業展開をされているとの事でした。

問題点としては評価の部分で、1年生と3年生が同じ時間で授業をしているので同じ事をしたとしても、必ずしも同じ評価にならないのではないかとこの事で、評価の部分については考えていかなければならない課題があるというお話がありました。

指導講評

青森県教育庁 指導主事 中川 伸吾 先生

発表を頂きました両名の先生方誠にありがとうございました。お忙しい中資料の作成大変だったかと思います。また各校の先生のおかれましては熱心な協議をして頂きありがとうございました。

まず評価についてですが、現行の学習指導要領では4観点ということでしたが新しい学習指導要領では3つの観点になるということで文部科学省の方でも研究指定校などを定めて様々な評価に関する研究調査が始まっています。

例えば秋田県教育委員会では小中学校連携による授業改善の取り組みや、福井県教育委員会ではパフォーマンス評価、ポートフォリオ評価などを取り入れた評価の研究など、委託先を決めて始めている状況ですので、今後どのような評価をしていけばよいのかという点については、研究指定校から徐々に情報発信が行われると思うので、そちらを参考にしながら自分の学校でどういう評価をしていくのかという事をこれから新しい学習指導要領で評価をしていかなければならないのではないかと思います。

お二人の先生方から発表頂きましたが、秋田北鷹高校の千葉先生からは組織的・体系的な学習の展開として総合実習の3カ年での展開について、学校設定科目である森林環境利用が2年次3年次にどういう風にして展開しているのかについて発表して頂きました。

本吉響高校昆野先生からは総合学科と言うことで人間環境系列の農業の中で特に3年次に行われた草花を取り上げて頂き、地域活動として苗の販売会を実施したり地域の植栽活動、あるいは幼稚園と連携をした植栽教室の運営を行っているという事例を基に発表して頂きました。

今回のテーマは主体的・対話的で深い学びということですが、新しい学習指導要領の中で授業改善は5つに整理されており、生徒の資質能力を育むことを意識して、基礎的・基本的で確実な習得を図りつつ農業の見方・考え方を働かせて授業の質を高めていくというところを目指しております。

従いまして我々教員には、授業全体をどのようにデザインしていくのかというデザイン力や、教科横断的な学びと言うことで色々な先生と協力して授業をコーディネートしていく力などが重要になってくるのではないかと思います。

今日の発表にもありましたとおり、キャリア形成を見据えて生徒の学ぶ意欲が高まるように、農業や農業関連産業に触れる機会を設けるという事が主体的な学びという点においても必要であると思います。

それぞれの学校で、例えば本吉響高校さんにおきましては2年次に農業の基礎的な事を学んで3年生で幼稚園の実習をやっておられるということでしたので、基礎的な知識を活かすために幼稚園に行って、学んだことをそこで活かすという流れになっているのかなと感じました。また学年が上がるにつれてレベルが上がっていくと思われますので、段階を踏んだ指導方法やプログラムが組まれているのかなと感じました。

次に対話的な学びですが生徒が自らの考えを深めたり広げたりする機会として生徒同士の協議の場や地域の農業関係者・農業界の方々との対話の場を設けるのが効果的と考えられますが、秋田北鷹高校におかれましてはまず生徒同士が課題研究の中で班別協議を行い、そして発表会を行うことで、個人個人の生徒が発言する場面など、生徒が活躍する場が設定されており、3年生になると全体で発表会をするという流れも出来ておりますので、こういうようなところも考えられているなと感じました。

深い学びにつきましては、やはり学んだことをいかに地域農業や地域社会の持続的な発展に繋げるかという視点が大事になってきます。現場見学あるいは課題研究の研究内容につきましても、地域のためになるような課題を設定することが深い学びに繋がっていくのではないかと感じるころです。課題研究だけでなく、これからは全ての農業科目において主体的に対話的な深い学びができるようにという指導の方向性が定められているので、先生方におかれましては情報交換されながら研鑽して頂きまして、今後ご指導のほどよろしくお願いしたいと思います。

福島県立岩瀬農業高等学校 教頭 今村 勝也 先生

中川先生からお話があったとおり、主体的・対話的で深い学びというテーマでしたがこれを行うことで何を身につけるかということ、今日の大きなテーマである「生きる力」です。

この「生きる力」は基礎・基本を確実に身につけさせ、あるいは課題を自ら見つけて自ら学び、自ら考えて主体的に判断・行動して他人を思いやる心や協調する心といった豊かな人間性、健康で体力などを育む力が「生きる力」であり、それぞれお二人の先生方の発表された内容が主体的に対話的な学びを工夫していただいた発表でした。

まず、千葉先生お疲れ様でした。2年次に教員からテーマを提示してそれに対する具体的な取り組みを考えさせて、3年次に2年次の経験を踏まえてより深いテーマを設定し、取り組ませていくということは、3年間を見据えた教育課程になっているという所が素晴らしいと思います。

次に、やったことをやりっぱなしにすることなく、2年次のポスター発表や3年次に発表会を実施しているところは生徒自身が身につけたことを相手に表現する、相手に教える、相手に自分の考えを伝えるという所が主体性を身につけるところに繋がっていくのではないかと思います。

次に、工夫したり改善したりすべき所をお話ししたいと思います。1つめはトライアンドレポートということで課題研究にトライし、レポートを実施するところは素晴らしいと思います。これは自分で課題を見つけて自ら学び、自ら考え、主体的に判断行動し問題を解決する資質や能力に繋がると思います。この手法は今までも行われていると思いますが、各学校がカリキュラムマネジメントをしっかりと行って生徒の学習において、教員の指導においてもPDCAを十分に行って次年度に繋げていくことが必要不可欠ではないかと私は思います。

なぜかという今、各県の農業高校は統廃合が非常に進んでいると思います。実業高校、特に農業高校がどうあるべきかを考えるときに、学校が生き残るためにはどうあるべきか、持続的にどの

ような生徒を育てていくかを学校教育目標と結びつけて考え、単年度の課題研究ではなく毎年毎年の課題研究の学習成果を蓄積して、その学校の一つの宝物にしていく。そして農業の変化に対応していくことが非常に大事ではないかと思います。ぜひ実践的・体験的な教科指導であってもP D C Aを十分に行って頂いて、今後も指導を行って頂きたいと思います。そして各先生方におかれましても課題研究を単なる一つの授業としてではなく、進路実現に繋がるような取り組みにして頂きたいと思います。大変素晴らしい発表だったと思います。

教員はすごく保守的で変化が怖いと言われます。勇気を出して一步を踏み出す事が大切だと思います。形だけの前例踏襲ではなく、常に前に進む一步を続けて頂きたいと思います。本当にお疲れ様でした

続きまして昆野先生の発表についてですが、総合学科ということで生徒数が2年生9名、3年生9名という少ない人数で工夫を凝らしながら植栽教室を中心に、園児と交流することで年少者と接する体験によって自らを律しつつ、他人と共に協調し他人を思いやる心、豊かな人間性を育むというところがとても素晴らしかったと思います。本当にお疲れ様でした。

2つめですが、毎年行われている野菜や花の苗の販売会についてですが非常に準備するのが大変かと思います。200名のお客様に4,000本の苗を販売すると言うことで大変かもしれません。ただ、こういう取り組みが地域に開かれた学校作りの1つになっていると思います。地域の方々が学校に足を運んでもらう機会を作ることは学校を理解してもらう上でも絶好の機会だと思いますので、ぜひとも今後も続けて頂きたいと思います。

次に工夫や改善について話をしたいと思います。発表の最後にあった汚泥を炭化处理した肥料を用いた栽培実験を今後も続けたいとのことでしたが、色々な取り組みを行うと各学校で必ず農業クラブの発表に結びつけたくなるものなのですが、農業高校の本質は違うのではないかと思います。

小学校では朝顔やバケツ稲の栽培など色々やっていると思いますが、そういう機会は段々少なくなってきていると思います。植物や動物に触れる地域の拠点となる場所が農業高校であると思います。汚泥を炭化处理した肥料を用いた取り組みを、地域に根ざしたものにして、ぜひとも学校の特色になるように、また学習成果の一つとして蓄積して頂きたいと思います。そうすることで生徒が集まってくるのではと思います。

ただ単に農業クラブの発表のためと言うことではなく、この学校ではこういう特色のあることをしている、ずっと毎年続けてデータをとって、実はそれが地域に還元されている。これらは学校作りにとって大切なことであると思います。ぜひとも今後も続けていただきたいと思います。

最後に教師の意識改革についてお話したいと思います。皆さん採用されたときの志高い気持ち、教育公務員としての使命感とか自覚といった心は今、いかがでしょうか。経験年数は皆さん違うと思いますが、時代が変わっても子供は一緒です。そうはいつでも子供も変わっていますよ、と思われるかもしれません。当然社会が変化し、家族や家庭の環境も変わっています。だから昔と同じ事を教えても同じように子供達が育つわけではありません。しかし子供達を農業を通じて育てる言うことは同じです。なおかつ私も含めこの場にいる先生方全員教育公務員です。教育公務員とは何かという原点に立ち返って、公務員の自覚を再度持って頂いてぜひとも日本の農業教育の発展に貢

献して頂きたいと思います。

さきほどのディスカッションは熱い心を持って取り組んで頂いたと思います。それが私は絶対大切だと思います。私たちは教育公務員ということで人を育てる、未来のある子供達を育てる特殊で崇高な職業であると思いますので、ぜひとも今後もその熱い気持ちを持ち続けて教職に向き合って頂きたいと思います。